日本の行くべき道

零戦

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
日本の行くべき道

【Ｎコード】
Ｎ６１９６Ｖ

【作者名】
零戦

【あらすじ】
今から七十年前の１９４１年１２月８日、日本帝国はアメリカ、イギリスと戦争状態に入った。
大東亜戦争中、多くの日本人が戦死した。
しかし、彼等の他にも日本のため、友のため、愛する人のために戦った戦乙女がいた。

その戦乙女は艦魂と呼ばれ、一部の関係者しか知られていなかった。

そしてあの戦いから七十五年が過ぎた２０１６年、それは神の悪戯なのか、それとも艦魂の宿命なのか、七十五年の時を経て二人の戦乙女の魂は再び艦に生を受けて平成の世に蘇った。

二人が待ち受ける運命は何のか？そして『　　』とは？それが知られた時、日本は再びあの激動の歴史を歩むことになる。

二人と『　　』は日本に勝利をもたらす事が出来るのか？

それは神のみぞ知るのみである。

『不定期更新です』

［あらすじ変更と、内容も変えます］

第一話（前書き）

連載四本ですが、これは不定期更新です。

現代戦はもう一回やってみたかってんなぁ。（一回失敗したし）

第一話

「私は此処までだ。『　　』、……日本を……皆を頼む」

燃える空母の艦橋で私はあいつと最期の別れをした。

あいつは泣いていた。

私の介護を付き添っていた二隻の駆逐艦から魚雷が二本放たれて私に命中する。

二隻の駆逐艦の艦上にいた乗組員達が私に敬礼をしながら去っていく。

駆逐艦の艦橋で二人の戦乙女が私の最期を看取ってくれた。

もう思い残す事はない……。

……いや、あいつに好きだと言えなかった。

私は傷の痛みを堪えながら飛行甲板に寝転がる。

艦橋では二人の将官が自決していた。

既に艦は沈没寸前。

……やはり言うべきだったな。

「『　　』、また会おう」

艦が沈む。

私はそこで暗い闇に飲まれた。

はずだった。

――――２０１６年、呉――――

私は気がついたら見たこともない軍艦の艦橋にいた。

どうゆう事だ？

私は確かにあのミッドウェー沖で沈んだはずだ。

だが、私は此処にいる。
死後の世界だろうか？
しかし、あれは江田島のはずだ。
見覚えがある。
……まさか此処は呉か？
だが、見渡す限りあの最後に見た呉の町ではない。
艦橋は日本人がいた。
海上自衛隊？
日本海軍ではないのか？
私は艦橋を離れて艦内を歩く。
食堂と思わしき所に着いた。
ふと、視線をテーブルに向けると一冊の雑誌があった。
のらくろ二等兵か？
そういえばよく蒼龍が見ていた。
だが、この雑誌は違っていた。

『海自、新型護衛航空母艦竣工！！』

そんな見出しだった。

項目をめくっていくと、私の写真が乗っていた。

『旧軍の名前を受け継ぐ空母、その名は飛龍！！』

私の名前だった。

では、この見出しの空母は……。

私は再び項目をめくる。

『護衛航空母艦、ミッドウェー海戦でただ一隻孤軍奮闘した空母飛龍の名を受け継いだ』

……私は確かにあの海で死んだみたいだ。

どうやら私は再び艦魂として生まれたようだ『　　』。

呪いか、それとも運命か？

いや、違う。

それが宿命なんだろうな。

だから、私は再び戦う。

いつの日か、またお前と会える事を祈ってる。

なぁ、『　　』

第一話（後書き）

御意見や御感想等お待ちしていますm（__）m

第二話（前書き）

第二話投稿です（、・ω・、）

第二話

「……『　　』、すまねぇ。俺はもうすぐ消える」

誰もいない防空指揮所で俺は呟く。

もう手も足も動かす力も残っていない。

「あいつに会ったのは開戦前だったなぁ……」

飛龍が開戦前の訓練中に、たまたま宴会の部屋に連れて来た。

最初はムカついた。

俺は大艦巨砲主義だった。

あいつも最初はそうだった。

けど、時代は流れるんだ。

戦艦が撃ち合うのは日本海海戦で終わってしまったんだ。

あいつも戦艦は好きだった。

でもあいつのパイロットの腕はピカイチだ。

あの戦争で何人の戦乙女やパイロット達が死んだのか……。

最後にあいつに会ったのはいつだろう……。

解体を待っている伊勢や日向、葛城に会いに行きたいけど、俺はもうすぐ解体が終わってしまう。

もう力が……動く力が出ない。

飛龍や大和も最期はこうだったんだろうな。

もう思い残す事はない……。

いや……まだある。

あいつに好きだと言えなかった。

俺は恥ずかしかった。

今までずっと恋なんてした事がなかった。

何回、告白の練習した事か……。

俺はいつの間にか涙を流していた。

もう俺は消える。

でもこれだけは言いたい。

「『　　』、俺は……お前が好きだ……」

やっと……やっと言えた……。

俺の意識はそこで暗い闇に飲まれた。

――――２０１６年、呉――――

気がつくと、俺は見た事もない軍艦の中にいた。

俺は死んだんじゃないのか？

俺は艦内を歩く。

軍艦は航行している。

俺は胸に手をそえる。

心臓がドクンドクンと動く。

俺は生きているのか？

軍艦の食堂らしきところに着いた。

食堂の中は懐かしいカレーの匂いがたちこもっている。

今日は金曜日なんだろうな。

俺はふと、テーブルの上に置かれた雑誌を手にとる。

カラーの写真を見るのは久しぶりだ。

戦争中、米軍が落としたカラーの写真を拾った事があった。

皆、楽しそうに笑っていた。

その雑誌のトップには一隻の軍艦が写っていた。

『新型イージス艦竣工！！』

『榛名の名を受け継ぐ艦、蘇る！！』

そんな見出しだった。

俺の名前？

項目をめくると、俺の写真があった。

じゃあ、この軍艦は……。

……悪い『　　』。

俺はまた艦魂として生まれてしまった。

呪いか、それとも運命か？

いや違う。

それが俺達、艦魂に定められた宿命なんだろうな。

『　　』、もうお前はこの世にいないだろうな。

何時、会えるかも分からねぇ。

でも会えた時、俺はちゃんと言うよ。

俺はお前を愛してるってな。

だから俺はお前と会えるその時まで戦い続ける。

それが艦魂、戦乙女に課せられた使命なんだからな。

『そうだろ？』

第二話（後書き）

御意見や御感想等お待ちしていますm（__）m

第三話（前書き）

え～一部ご都合なのでご了承下さい。

第三話

「……遂に、日本も空母を持ったわね……」

呉の潜水艦桟橋近くに三人の女性がいた。

「姉さん、早くひりゅうに会いに行こうよ」

ツインテールにした黒髪の女性がポニーテールの黒髪の女性を急かす。

「はいはい、くらまはせっかちね。いせ、行きましょ」

「そうだな」

ショートヘアでボーイッシュな女性に声をかけて、三人は光りに包まれた。

――――ひりゅう飛行甲板――――

「わぁ、大きいなぁ」

くらまがはしゃぐ。

「全長は１９５００ｔ型ＤＤＨより七メートル大きい２５５メートルだからね」

「それに、日本が待ち望んだ初の国産空母だからな、しらね」

いせが女性――しらねの言葉を補足する。

「そうね……、１９５００ｔ型ＤＤＨを諦めてより巨大にして出来たのがこの３５０００ｔ型航空護衛艦だからね……」

しらねはひりゅうの艦体に触れる。

ひりゅうは諸外国で表すと、『正規空母』である。

今だに憲法改正をしていないので、正規空母ではなく航空護衛艦になっている。

搭載機は空母艦載機型に改修したＦ―２Ｃ戦闘機二四機、ＳＨ―６０Ｋ哨戒機六機機である。

約三万五千トンにそんなに航空機が入るのか？

Ｆ―２Ｃは翼の半分程から折れ曲がる折り畳み式に改修されているので問題はない。（多分）

兵装は高性能二十ミリ機関砲四基、発展型シースパロー短ＳＡＭ／アスロックＳＵＭ（Ｍｋ４１ＶＬＳ後部２４セル）、十二・七ミリ単装機銃等である。

「さて、ひりゅうに会いに行きますか」
三人が中に入ろうとした時。

「待て、貴様ら何者だ？」
一人の女性が艦内へ入るドアに現れた。
「誰だてめぇは？」
「まず貴様らが名乗るのが当たり前だろう」
「な、何だとてめぇッ！！」
いせが怒る。
「まぁまぁ落ち着きなさいいせ。彼女の言う通りよ。ごめんなさいね、私はしらね型護衛艦一番艦のしらねよ」
「ボクは二番艦のくらまだよ」
「チ、俺はひゅうが型二番艦いせだ」
三人が女性に敬礼する。
「……そうか、くらまといせは伊勢さんや鞍馬さんの名前を受け継いでいるのか……」

女性は懐かしそうに言い、そして三人に見事とも言える敬礼をした。

「私は日本帝国海軍航空母艦飛龍だ」

「……日本帝国海軍……」

「……航空母艦……」

「……飛龍だと……？」

三人は唖然とした。

「ふむ、この服は米軍みたいだな。やはり私はこれが一番だ」

飛龍は自衛隊の幹部服を脱ぎ捨て、艦魂の力で旧海軍の将官服を出してそれに着替えた。

「ちょ、貴女何をしているのッ！？」

いち早く我に返ったしらねが言う。

「？これが私の服だが？」

「それは旧海軍の将官服よッ！！貴女の服は脱ぎ捨てた服よッ！！」

「あんなの着てたら心まで米軍になる。あんなの着ていられるか」

飛龍は吐き捨てた。

「お前、頭打っただろ？」

いせが笑う。

「……悪いが頭は打っていない」

飛龍はしらねの額に手を当てる。

「な、何をッ！？」

「少し黙れ。私の記憶をお前に見せる」

「ッ！？」

「……此処は……」

しらねはいつの間にか見知らぬ空母の飛行甲板にいた。

「あれは零戦ッ！？それに九九式艦爆や九七式艦攻までッ！？」

飛行甲板には、今や映像や博物館でしか展示されてない零式艦上戦闘機や九九式艦上爆撃機、九七式艦上攻撃機が多数いた。

そして周りには三隻の空母がいた。

「あれは……赤城ッ！？それに加賀ッ！？蒼龍ッ！？」

しらねは驚いた。

「じゃあ……この空母は飛龍……。まさかこの艦隊は南雲艦隊ッ！？」

しらねが絶句している。

その時、見張り員が叫んだ。

「あ、赤城上空に敵急降下ァァァーーーッ！！！」

しらねが反射的に上空を見上げる。

上空には十数機の米海軍ダグラスＳＢＤ『ドーントレス』急降下爆撃機が一斉に三空母に向かって急降下を開始した。

ドンドンドンドンッ！！

ドドドドドドドッ！！

各艦の十二・七センチ連装高角砲が火を噴き、空一面が黒い煙に覆われる。

そして二十五ミリ三連装対空機銃弾が空を赤く飛び回る。

数機のドーントレスが直撃弾や機銃弾で撃ち抜かれるが、生き残っ

ていた多数のドーントレスが一斉に搭載していた四百五十キロ爆弾を投下した。

外れた爆弾は虚しく水柱を上げる。

だが、数発の爆弾は吸い込まれるように三空母に命中した。

ズガァァァァァァーンッ！！！

三空母があっという間に猛火に包まれた。

格納庫や、飛行甲板に転がっていた二百五十キロ爆弾や八百キロ航空魚雷が次々と誘爆したのだ。

「赤城ィッ！！加賀ァッ！！蒼龍ゥッ！！」

乗組員の怒号が響く中、しらねは女性の叫び声を聞いた。

「……ひりゅうッ！！」

防空指揮所にあのひりゅうがいたのだ。

「……まさか……ひりゅうは本当に……」

しらねがそう呟く時、たれ目で太った将官が飛行甲板に来た。

「これより敵機動部隊に対して反撃を行うッ！！赤城、加賀、蒼龍の弔い合戦だッ！！米軍に飛龍の名を受けたこの龍の牙を見せてやれェッ！！！」

『ウオォォォォォォーーーッ！！！』

そして第一次攻撃隊として零戦と九九式艦爆が発艦する。

「　　ッ！！頼む、皆を仇を討ってくれッ！！」

飛龍は一機の零戦の右翼に乗って、一人の青年パイロットに激を飛ばしていた。

「任しとけや飛龍。三人の仇は必ず取るで」

青年はそう言って、発艦した。

零戦と九九式艦爆の第一次攻撃隊が発艦すると、第二次攻撃隊として、零戦と九七式艦攻が発艦する。

「友永隊長、無茶はせんで下さい。片翼の燃料タンクが損傷しとるんです。乗機を変えるか、発艦は止めて下さい」

「大丈夫だ。場所は近いから帰ってこれるさ」

友永隊長と呼ばれた隊長は部下にそう言って、笑顔で発艦した。

「……今度は薄暮攻撃か……」

「あぁ、まぁ俺は大丈夫や。さっきもグラマンを四機落としたしな」

しらねは防空指揮所に移動して飛龍と青年の話しを聞いていた。

「次も頼むぞ　　」

「あぁ任しとき」

二人が笑ったその時、見張り員が叫んだ。

「て、敵急降下ァァァッ！！直上ォォォォーーーッ！！！」

いつの間にかドーントレスが急降下爆撃を開始していた。

そして、四発の四百五十キロ爆弾が吸い込まれるように飛龍の飛行甲板に命中した。

第三話（後書き）

御意見や御感想等お待ちしていますm（__）m

第四話

「はッ！？」

しらねは気がつくと、ひりゅうの艦内にいた。

「姉さんどうしたの？」

しらねの行動に不審に思ったくらまがしらねに話し掛ける。

「（……今のは……それに時間は全く経っていない……）」

「見たか？」

ひりゅうが問い掛ける。

「……えぇ、貴女が旧海軍の空母飛龍の艦魂である事は分かったわ」

「し、しらねッ！？お前まで何を言ってるんだッ！？」

「いせ、事情は後で説明するわ。ひりゅう……いえ、飛龍。貴女は何故また艦魂として生まれたの？」

「……分からん。確かにあの時、私はミッドウェーで赤城達と死んだはずだ。だが、気づけば此処にいた……というわけだ」

「……分からないわね」

「あぁ……」

しらねと飛龍が黙り込み、くらまといせは完璧においてけぼりを食らっていたのは間違いなかった。

「……何を言ってるんだろぅ……」

「……俺が知るか……」

その時、航空機の爆音が響いた。

洋上迷彩をした二機のF―2Cが、哨戒飛行から帰ってきた。

「こちら震電1、哨戒飛行を終えた。着艦許可を求む」

『了解。着艦許可を認める』

二機のF―2Cは着艦した。

二人のパイロットがF―2Cから降りる。

整備員が二機に群がり、エレベーターで格納庫まで下げる。

二人は艦橋に向かい、ひりゅう艦長の加来弘一佐に報告をした。

「只今、哨戒飛行から帰還しました」

「うむ、任務ご苦労だ」

二人は艦橋を出る。

「ぁ～疲れたぁ～」

「何でや？」

「あんたとおるから」

「俺の目の前で言うなよ紫電」

女性パイロットの言葉に男性パイロットは溜め息をはく。

「全く、昔からそうなんやから」

「いいじゃない零。これが私なんだから」

「まぁそうやな」

男性パイロット――――東雲零（しののめれい）三尉は答える。

女性パイロット――――川西紫電（かわにししでん）三尉はふぅとため息を吐く。

「それにしても、空自に入ったと思ったらいつの間にか海自の空母パイロットだもんね～」

「まぁそう言うなや紫電。ロシアや韓国、北朝鮮、中国を抑えるためにこいつが必要やねんからな」

零は艦体を触る。

「……ようやく、日本も戦う力が持てたんや。文句を言うなよ」

「そうだね」

紫電は頷く。

「ん？誰だろあれ」

紫電が指差す先にはしらね達がいた。

「おい、お前ら誰や？」

突然言われた言葉にしらね達は固まった。

『この二人は艦魂が見えるのか？』

いち早く我に返ったのはひりゅうだった。

「さぁ、誰だろうな」

ひりゅうはフッと笑う。

「あのな、こっちは質問しとるねん」
男性パイロットは溜め息をつく。
「まぁまぁ落ち着きなよ零」
女性パイロットが男性パイロット———零を落ち着かせる。
「それで所属は何処なの？あ、もしかして迷子（笑）？」
「いや、迷子ではない。私達は……艦魂だ」
ひりゅうが言う。
「……艦魂……」
零が呟く。
その時、零は炎上した空母の防空指揮所にいた。
「……え？」
そして、零の目の前には艦魂と言った女性———ひりゅうが血の海に中にいた。
「　。私は……ここまでだ……日本を……頼む……」
零は思わず叫んだ。
「飛龍ッ！！」

「な、何だ？」

「……え？」

気がつくと、零はひりゅうの艦内にいた。

「……夢……か？」

零は呟く。

「零て夢遊病あったけ？」

紫電がツッコミを入れる。

「いやないわ」

「あ、いたッ！！東雲ッ！！」

「何や坂井？」

零の同僚である坂井三郎三尉が走ってきた。

「じ……自衛隊が……」

「何やねん坂井。自衛隊がどうしてん？」

坂井は息を整えて、衝撃的な発言をした。

「自衛隊が日本から無くなるんだッ！！」

その瞬間、その場にいた人間全員が固まった。

第四話（後書き）

御意見や御感想等お待ちしていますm（__）m

第五話（改）（前書き）

修正投稿です。

問題の部分は削除して、ひりゅうとはるなの説明が無かったので増やしました。

ご都合の部分は武器輸出三原則、F―X、憲法改正です。

この度はこちらの認識不足で多くの読者様に不愉快な気分にさせてしまった事に真に申し訳ありませんでしたm（__）m

第五話（改）

日本の政権を握っているのは２０１２年から再び政権の座に着いた自民党である。

前政権の民主党は管直人元首相のよく分からない政治態勢にごちゃごちゃとなり、国民の信頼はどん底だった。

管元首相が辞任する際の支持率は僅か５．４％と前代未聞の数字であった。

新たに首相になった自民党総裁の渓垣は、東日本大震災で被災した海岸線地域の瓦礫撤去の補佐として東北地方の陸上自衛隊の部隊を投入した。

渓垣は失業者や震災で職を失った者には自衛隊への入隊を促した。

また、自衛隊の入隊試験の一部緩和もした。

更には、震災地域の者が入隊した場合を無条件でその震災地域の駐屯地の配属とさせた。

衣食住が完璧である自衛隊の入隊には失業者達は歓喜を上げながら入隊した。

財務省が「自衛隊に入れすぎだ」と発言したが、渓垣は発言した人物を次々と更迭して黙らせた。

さらに、渓垣は国会議員の給料削減を提案した。

議員の給料三分の一をカットにしてその分を被災地や他の資金に回すのだ。

これには民主党が反発したが、無理矢理通した。

これは国民にウケ、渓垣の支持率は上がった。

環境問題として渓垣は２０３０年までに原発は縮小して太陽光等の新エネルギーと石油等の火力発電を中心にしたエネルギー政策を発表した。

更には、新エネルギー源としてメタンハイドレートの大規模開発を決定。

コストを抑えるため今まで南海トラフでやっていた事業を日本海側へと移転させた。

またスパイ防止法を制定した。

主な取り締まりは産業スパイや軍事スパイの取り締まりである。（逮捕者は民主党議員もいた）

また、軍事面にも力を入れた。

陸自の人数を三十万まで増やし、１０式戦車等を増強した。

海自も新型の音響測量艦とはやぶさ型ミサイル艇の増強をした。

さらにはむらさめ型護衛艦、たかなみ型護衛艦とあきづき型護衛艦の増強を決定した。

むらさめ型は総勢１６隻、たかなみ型は総勢１２隻、あきづき型は６隻に変更した。

また、新型大型護衛艦としてはるな型護衛艦の建造中である。

武装等は後ほどに語ろう。

さらには、航空護衛艦（後のひりゅう）も建造中である。（はるな型とひりゅうは２０１６年に竣工した）

武器輸出三原則も大幅に緩和して最古参のはつゆき型の半数は退役して、タイや台湾などに売却された。

空自はＦ―１５Ｊを主力としつつ、Ｆ―Ｘはユーロファイタータイフーンに決定した。

築城基地のＦ―２の飛行隊を空母に搭載するために四十機程度の生産を七十機（復座型も含めて）程度に増やした。

渓垣はこれだけをすると、自民党総裁の満期が終了したために内閣を総辞職した。

そして自民党総裁選の結果、年齢５６歳の長谷川勝が新たな自民党総裁になった。

―――首相官邸―――

長谷川は官邸に備えつけられたテレビを見ながら妻からの弁当を食べていた。

「そ、総理ッ！！」

秘書が慌てて入ってきた。

「どうしたのかね？」

卵焼きを食べている長谷川が言う。

「は、はい。相変わらず中国と韓国、北朝鮮から抗議文が来ています」

「『空母は保有するな』とか？」

「はい」

「……あの三国は何を考えているんだ？空母は防衛用として配備するんだ。内政干渉だろう」

「はぁ。それと、民主党や社民党から『空母を廃棄しろ。憲法九条廃止をするな』と日に日に強く言っています」

長谷川は秘書の言葉にニヤリと笑う。

「奴ら、国会は既に大半が自民党議員が占めているのによく言えるな」

「そうですね」

長谷川は再び、弁当を食べはじめる。

長谷川は通常国会中に憲法九条廃止を提出しており、今のところは長谷川の計画通りである。

三日後、長谷川の法案は両院とも通過して国民の承認を得るため、国民投票が行われた。

そして、国民投票の結果、憲法九条廃止の賛成は八十％となり、天皇陛下は公布した。

そして、長谷川は自衛隊を日本国防軍に改名させた。

これに対して、中国や韓国、北朝鮮の三国のメディアはこぞって『日本の帝国主義が復活』『日帝が復活』など放送した。

第五話（改）（後書き）

御意見や御感想等お待ちしていますm（__）m

第六話（前書き）

久しぶりの更新。

F―Xはとうとうタイフーン、F／A―18E／F、F―35に絞られた。

どうなんのやろ……。

第六話

青い大空の中を俺は零戦に乗っていた。

あぁ……またこの夢なんか……。

『飛行隊長。2時の方向が呉です』

2時の方向は黒煙があがっていた。

「……糞ッ！！呉市民の敵討ちやッ！！『飛行隊長ッ！！太陽からグラマン来ますッ！！』全機散開やッ！！」

ダダダダダダダッ！！

太陽からグラマンが急降下攻撃をかけてきた。

ズガァァァンッ！！

『隊長ッ！！高橋がやられましたッ！！』

「全機グラマンには構うなッ！！攻撃目標はヘルダイバーとアベンチャーやッ！！」

『了解ッ！！』

そして零戦二六機はヘルキャットの攻撃をかわして、乱戦となっている呉上空へ突入した。

「起きたか。メシだぞ」

「……あぁ」

エプロン姿の金髪の女性に礼を言いつつ、零はパジャマから着替えてリビングに向かう。

「お早う零」

「お早うございます虎さん」

リビングのテーブルで、新聞を読んでいたハゲの男性に挨拶をする。

「何だ？飛燕に叩き起こされたのか？」

「ちゃいますよ。またあの夢を見てたんです」

「……呉空襲か？」

「はい。また3月19日のです」

「……前世のお前はそこで死んだのか？」

「さぁ、それは分かりません。多分生き残っていたんじゃないすか？」

「ハッハッハ。お前のような奴は長生きしそうだからな」

虎は愉快そうに笑い、新聞に目を移す。

「しかし……また厄介だな韓国は……」

「えぇ。対馬で海保の巡視船が韓国の違法漁船を拿捕したようですから」

「そして、韓国は漁船の乗員を解放せよ……か」

「何を言ってるんですかねぇ」

二人が話していると、ぞろぞろと恐そうな面をした男達が来た。

「社長、零さんお早うございます」

「おぅお早う」

「お早うやな」

二人は挨拶を返す。

「メシが出来たぞ」

そこへ、エプロン姿の金髪女性――飛燕が朝食を持ってきた。

『頂きます』

合計で十人の人間が朝食を取る。

「紫電はまだ寝てるのか？」

「あぁ。昨日は夜中までエースコンバットをしてたらしいからな」

「Ｆ―２のパイロットなのにエースコンバットかよ……」

零の言葉に虎や組員達は苦笑した。

「あいつのメシは昼からでいいだろうな」

味噌汁を啜る飛燕が言う。

そろそろ虎達の自己紹介をしよう。

藤堂影虎。

彼は藤堂警備会社の社長である。

だが、警備会社でもただの警備会社ではない。

この警備会社の創設は１９４５年８月であった。

これは初代社長が関係していた。

初代社長は戦時中は海軍軍人として戦場にいた。

終戦後、彼は日本人を守りきれなかった事を悔やんで、せめての償いとして警備会社で民間人を守ろうとしたのだ。

会社は元軍人や失業者などを引き入れて、会社の勢力を拡大して今の会社は大阪市内のあらゆる警備まで任されるようになった。

無論、これは大阪府警も知っているが、別に問題はない。

むしろ、盗みをしようとした十数組のヤクザや在日韓国人を捕縛して警察の手錠をかけさせてもらっているからである。

今では、警備会社は西日本ベストテンに入る警備会社になり、ホームレスだった男や退職した自衛隊員もいる。

しかし、警備会社にヤクザからの報復があった。

紫電は二代目社長藤堂影虎の一人娘であった。

ちなみに性が違うのは有名な警備会社の娘だからと虐められないように、母親の性を名乗っている。

零の一家は藤堂家の隣でよく零も紫電と遊んでいた。

それを、零も藤堂の息子と勘違いし、報復に来たヤクザは零の両親を殺害してまったのだ。

それ以来、零は藤堂家でお世話になっている。

飛燕も似たような事である。

飛燕は日本人の父親とドイツ人の母親との間に生まれたハーフである。

飛燕の一家も報復に巻き込まれ、飛燕の両親は殺害されてしまった。

藤堂は飛燕を引き取り、立派に成長させるのが自分に課せられた義務と思って今日まで至るのだ。

三人は何の因果かは知らないが自衛隊に入り、三人共F―2のパイロットになったのであった。

「ん、もう時間やな。そろそろ行きますわ」

朝食を食べた零が言う。

「紫電はいいのか？」

「……忘れてた……」

そして、零は紫電を叩き起こして、家族に見送られながら家を出た。

第六話（後書き）

御意見や御感想等お待ちしていますm（__）m

第七話（前書き）

第五話の改訂を出しました。

第七話

――２０１８年、７月１０日対馬沖――

『そこの韓国漁船に警告する。貴船は日本の領海内で違法漁業をしている。直ちに停戦せよ』

２０１５年に竣工した最新型の巡視船せと、きさらぎ、ながらは先程から対馬沖で違法漁業をしている韓国の漁船四隻に対して、警告を促している。

しかし、四隻は巡視船の警告を無視して普通に漁業をしている。

「船長、警告射撃の許可を願います」

せとの航海長が言う。

「うむ」

５分後に返答が来た。

「船長、第七管区より通信です。警告射撃を許可するとのことです」

「よし、これより警告射撃を行う」

せとは拡声器で警告射撃を行うと警告放送してからＲＦＳ付きの二

十ミリ多銃身機関砲と同じくＲＦＳ付きの四十ミリ多銃身機関砲が上空と海面に向かって威嚇射撃をする。

四隻の韓国漁船はようやく停戦をした。

「さて、逮捕するか。これで何度目だ？」

せとの船長はそう呟いた。

――――首相官邸――――

「長谷川総理。韓国大使より、漁船の乗組員を釈放と対馬を返還しろと言っています」

「理由は？」

「は、聞きましたら対馬は韓国の領土である。なので日本は乗組員の釈放と対馬を返還しろと……」

「拒否すると伝えろ」

長谷川はただ一言、それを言った。

「分かりました」

秘書は長谷川に頭を下げて部屋を出る。

「……」

長谷川は無言で誰かにメールを打った。

――――呉基地――――

「全艦出港ッ！！」

第四艦隊司令官南雲忠少将の号令のもと、呉基地の第四艦隊が出港する。

第四艦隊の陣容は旗艦ひりゅうを筆頭にして、第四戦隊いせ、はたかぜ、はまぎり、うみぎりで、第八戦隊きりしま、いなづま、さみだれ、さざなみが第一航空戦隊のひりゅうを守るように輪形陣を組む。

その外側には、呉地方隊の護衛艦せとゆき、あぶくま、せんだい、とねが航行をしている。

「司令官。目的地は本当に対馬で？」

参謀長の日下が尋ねる。

「あぁ。といっても、韓国軍の出方を押さえるためだ」

対馬には陸海空の部隊がいる。

陸軍は二個連隊。

海軍は対馬地方隊としてはつゆき型のやまゆき、まつゆき、あさゆきが対馬の港に停泊している。

空軍はレーダー基地と警務隊である。

「何もなければいい。奴らはひりゅうに怯えていればいいんだ。そうしたら我々も何もしない」

南雲はそう言って、前方の海面を見つめた。

しかし、韓国は第四艦隊が対馬に停泊中は何もしてこなかった。

――――呉――――

呉に一隻の軍艦が入港してきた。

その軍艦は川崎重工業船舶海洋カンパニーの神戸工場で作られた。

武装は前後にあたご型やこんごう型より大型の連装主砲を搭載している。

前部には連装砲二基、後部に一基である。
そして、両舷には六二口径七六ミリ単装速射砲が合わせて二基あった。
「……あれが新型のイージス巡洋艦ね」
その軍艦を呉に停泊する護衛艦しらねの甲板からしらねが見ていた。
しらねとくらまはこのイージス巡洋艦と引き換えに呉で解体する予定であった。
しかし、何の運命かは知らないがしらねとくらまは延命措置を取られて、函館に新しく新設される第五艦隊に所属する事になった。
検討地としては青森の大湊基地も候補にあったが、平館海峡で潜水艦による奇襲攻撃を受ける可能性もあったので函館に決定したのだ。
新型イージス巡洋艦は桟橋に接舷した。
「さて、新しい艦魂に会いに行くわよ」
「了解だよ」
二人は転移をした。

――――イージス巡洋艦はるな甲板――――

「へぇ～。これが二十・三センチ連装砲か～」

くらまが前部二基にある二十・三センチ連装砲を眺めていた。

「排水量は一万九千トン。他の護衛艦や駆逐艦よりも装甲を厚くして一、二発のハープーンでも沈みはしないわ」

しらねも誇らしげに二十・三センチ連装砲を見ていた。

「……それでも、俺は三十五・六センチ連装砲を搭載してほしかったな。三十五・六センチ連装砲は俺にとっても馴染み深いからな」

突然、後ろからの言葉にしらねが振り向く。

そこには旧海軍の将官服を着ている女性がいた。

第七話（後書き）

御意見や御感想等お待ちしていますm（__）m

第八話（前書き）

次回から一気に戦争に行きます。

第八話

「……貴女は？」

しらねは若干驚きながらも女性に尋ねた。

「これは失礼したな」

女性はそう言ってしらね達に見事な敬礼をした。

「日本帝国海軍連合艦隊所属、元第三戦隊に所属していた戦艦榛名の艦魂の榛名だ」

イージス巡洋艦はるな――榛名はそう言ってニヤリと笑った。

――――空母ひりゅう――――

「……」

ひりゅうは飛行甲板で桟橋近くの道路を見ていた。

「空母は解体ッ！！」

「日本国防軍は解散ッ！！」

「軍国だッ！！」

道路には百人程の市民団体が集まって、ひりゅうに向かって叫んでいた。

「……」

ひりゅうはそれをただ見ているしか出来なかった。

「あれは自称平和団体や」

「ッ！？」

突然の声に後ろを振り返ると、飛行服を着た零がいた。

「また会ったな」

零はひりゅうにそう言った。

「やはり貴様とあの女は私が見えるか？」

「あぁ。艦魂とか言うあれやろ？ネットの小説で話題になっているな」

「そうか……」

ひりゅうはそう言って再び平和団体を見る。

「あんま見んとき。あんなん見てたら気持ち悪なってくるわ」
「……これが今の日本人なのか？」
「一部やな一部」
零は一部を強調する。
「あれは日教組と左翼のせいでああなったんや。全く、今の日本はどうなってんねん……」
零が溜め息を吐いた。市民団体は相変わらず叫んでいた。
「……私達がアメリカと開戦したせいだろうか……」
「それは分からん。でも、アジア解放のために戦ったのは事実とちゃうか？まぁ陸軍の占領政策が悪かったのも原因ちゃうか」
「そうか……」
ひりゅうはそう言って帽子を取る。
ひりゅうのポニーテールにした髪が風で靡く。
「……（あれ……これはどっかで見たような……）」
そう零が思った時、何かの映像が脳内に流れた。
『何を見ている？』

『いやなに、飛龍の髪をな』

『ば……馬鹿……』

ひりゅうと零が何処かの空母の防空指揮所で話しをしていた。

『　ッ！！てめぇなに飛龍の髪を見ているんだッ！！』

そこへ飛龍と同じ将官服を着たショートヘアの女性が現れた。

『何やねん榛名？ただ単に髪を見てただけやんか』

『うるせぇッ！！』

「……ぃ……」

「え？」

「零、どうした？」

ひりゅうの呼びかけに零が気がつく。

「ぁ……あぁ。大丈夫や」

「風邪か？」

「多分そうやろ（気のせいやろな……）」

零はそう片付けた。

「戦艦榛名の……」

「艦魂……」

しらねとくらまが交互に言う。

「あぁそうだ。俺はイージス巡洋艦はるなの艦魂と同時に戦艦榛名の艦魂だ」

「そうなのね……」

「何かあまり反応は無いな？」

「だって、君と会う前にもそう言った子がいるしね」

「な、何だとッ！？」

くらまの言葉にはるなは驚いた。

「俺の他にも旧軍艦艇の艦魂がいるのかッ！？」

「い、いるから手を離してぇ～」

はるなはくらまの肩に手をとり揺らしていた。

「わ、悪い。で、誰だそいつは？」
「ついこないだ竣工したばかりの航空護衛艦ひりゅうよ」
「なッ！？」
今度はしらねの言葉にはるなは驚く。
「ひ、飛龍がいるのかッ！？」
「そうよ。艦はあれよ」
「あれだなッ！！」
しらねは場所を教えると、はるなは直ぐさま艦魂特有の力である転移移動をした。

「へぇ、此処がひりゅうの部屋か」
「まぁ何にもないわね」
「それを言うな」
零と紫電はひりゅうの部屋を訪れていた。
部屋はベッドと机に椅子、それと箪笥しかなかった。

「コスプレとか置いてないの？」
「あるわけないだろう……」
紫電の言葉にひりゅうは溜め息を吐いた。
「てか、女の子やねんから何か買ったらどうや？」
「そうは言っても我々艦魂は陸上の活動は出来ないからな」
「そうか……。なら俺達が何か買ってきてやるわ」
「そうそう」
「……ありがとう……」
二人の言葉にひりゅうは笑った。
「飛龍ッ！！」
その時、ショートヘアで旧軍の服を着た女性が転移をしてきた。
「……榛名？」
「飛龍ッ！！」
女性――榛名は飛龍の姿を見ると抱き着いた。
「よかった……生きてたんだな……」

「榛名……どうして……」

「俺も……再び艦魂として蘇ったんだ。イージス巡洋艦はるなとしてな」

そして、これで役者は揃ったのであった。

第八話（後書き）

御意見や御感想等お待ちしていますm（__）m

第九話（前書き）

お騒がせしましたm（　）m

第九話

――――8月1日、総理官邸――――

「暑いなぁ石羽さん」

「あぁ、今年の夏も暑いよ長谷川君」

総理官邸で首相の長谷川と防衛大臣の石羽繁は将棋をしていた。

「石羽さん。ひりゅう型空母の二番艦の竣工はいつ頃になりますか？」

「……極秘だが予定を前倒しにして竣工している。今は乗組員が慣熟訓練をしている」

「そうですか……。搭載する航空機は？」

「三沢基地のF―2だな。三菱が必死にF―2Cへ改造している。それが二十機の一個飛行隊、それとSH―60K哨戒機三機だ。F―2パイロットはひりゅうで練習している。錬度は八十％くらいだ」

石羽はそう言ってお茶を飲む。

「出来るだけ早く戦力化は出来ないですか？」

「……やはり中国か？」

「……」

石羽の問い掛けに長谷川は無言で頷く。

「つい先日、劉備型通常空母の一番艦劉備と二番艦孫権が竣工しました」

「……それに旧ソ連の空母ヴァリアーグ……長城が既に稼動している」

「はい。ですが、劉備型はまだ三隻が建造中です」

「一般公開での名前は曹操、孫策、張遼となっている」

「……とりあえずは中国と韓国の動向を見守りましょう」

「うむ」

石羽が頷く。

「そういえば、ＡＨ－６４Ｄの艦載機型はどうなっていますか？」

「既に陸自のヘリパイロットが海自のヘリパイロットに操作の仕方を教えている。錬度は五十くらいだろう」

石羽がお茶を飲む。

十三機で調達が終了したＡＨ－６４Ｄ戦闘ヘリコプターはひゅう

が型ヘリ空母（ヘリ空母に名称を変更した）に四機ずつの計八機を二隻に搭載する事が決定した。

残りの五機は予備扱いとなり、霞ヶ浦駐屯地に配属されている。

ちなみに、ＡＨ―１Ｓ対戦車ヘリコプターの後継機はＯＨ―１観測ヘリコプターの重武装型に決定された。

武装は三十ミリ機関砲、七十ミリロケット弾、ヘルファイアミサイル等を搭載するようにしている。

調達予定は百二十機となっている。

「ところで石羽さん。Ｆ―３の開発はどうなっていますか？」

長谷川が醤油煎餅の袋を開けながら言う。

「大分順調に育ってきているな」

Ｆ―３は実験検証機心神の飛行データ等を参考にして国産を目指している第五世代戦闘機である。

国防省はＦ―３の費用はかなり出している。

「と言っても採用はまだ先だな。二十年以降だろう」

石羽は苦笑する。

ちなみにＦ―３は艦載機型も検討していている。

「そ、総理ッ！！」

その時、秘書が慌ただしく入ってきた。

「何だ？」

「は、はい。中国の漁船監視船が尖閣諸島付近にうろついています」

「……またか。それで今はどうなっているんだ？」

長谷川はうんざりするように秘書に聞いた。

「はい。領海内を行ったり離れたりしています」

「……沖縄に地方隊を設立してから急に活発になってきたな……」

石羽が呟く。

沖縄には海軍の新地方隊が設立されて、はるさめ型護衛艦の追加で建造されたしらつゆ、うみかぜ、やまかぜの三隻がいた。（佐世保地方隊の沖縄基地隊は沖縄地方隊の配属となった）

また、対馬には特例としてはつゆき型護衛艦が駐留している。

更に沖縄方面関連では、宮古列島にある下地島の下地島空港を軍民共用化にして、築城基地のＦ―１５Ｊ飛行隊を配備している。（このため築城基地は全てタイフーンの部隊で形成されている）

「……ロシアの動きはどうなっていますか？」

長谷川は秘書を下がらせた後、石羽にそう聞く。

「去年の演習以来、まだ何もないな」

ロシアは北方領土は我が国の領土とするために毎年、ウラジオストクのロシア海軍に演習があったが、今年はまだない。

国防の観点から海軍の函館基地に第五艦隊と北海道地方隊（はるさめ型護衛艦のみねぐも、あさぐも、あさぎり型護衛艦のせとぎりが配備されている）を今年から新設して、ロシアの動きを牽制している。

「日本の周りは脅威だらけだな……」

長谷川はそう呟いた。

外ではクマゼミが鳴き、気温も三十五度を越えていた。

第九話（後書き）

アパッチはひゅうが型に搭載しましたがおおすみ型にも搭載した方がいいですかね？

それか米軍から強襲揚陸艦を借りるか……。

御意見や御感想等お待ちしていますm（__）m

第十話（前書き）

大分遅れました。

とある政党は完全に作者の妄想ですので気にしないで下さい。

第十話

――９月２０日――

キイィィィーンッ！！

ジェット機特有の甲高いエンジン音が鳴り響く。

慶良間列島と宮古島のほぼ中間地点を日本国国防海軍第四艦隊が航行していた。

空母ひりゅうの上空にはＦ―２Ｃが飛行している。

ひりゅうの着艦コースにＦ―２Ｃが入って、車輪を出す。

Ｆ―２Ｃは艦載機化に当たって、前部車輪の改造をしていた。

一枚車輪だったのを二枚車輪に代えていたのだ。

ちなみに二枚車輪の参考はＦ／Ａ―１８Ｅ／Ｆの車輪を参考にしている。（あくまで参考）

「……」

その着艦作業をひりゅうは艦橋から見ていた。

「……これで中国は帰ればいいんだが……」

その横で第四艦隊司令官の南雲少将が呟く。

尖閣諸島の沖合に再び中国の漁船監視船が来ていたのだ。

今は尖閣諸島の領海内を出たり入ったりして、海保の巡視船四隻が警戒をしており更には上空には新鋭哨戒機のP―1もいた。

「政府はどうでるんでしょうか？」

「さぁな。最終的には尖閣諸島に少数の部隊が派遣されるんじゃないのか？」

実際に、政府内では海保と陸軍の部隊の派遣を考えていた。

陸軍は駐屯するより沖縄地方隊の護衛艦による定期哨戒を提案していた。

陸軍も駐留したいのは山々だが、対戦車ヘリの更新や１０式戦車の更新などで部隊の派遣はあまり芳しくなかったのだ。

海軍としては陸軍の駐留をと思っていたが、陸軍の事情に半ば認めていた。

まぁ軍がそう考えても最終的には総理が決める事になっているので、そうなるかは分からない。

「まぁ、我々は此処で訓練をしていようじゃないか」

南雲の言葉に参謀長の日下は頷いた。

それから、第四艦隊は中国の漁船監視船が引き上げるまで訓練を続けた。

――――官邸――――

「そうか。漁船監視船は漸く尖閣諸島から離れたか……」

「はい」

長谷川の呟きに石橋が頷く。

「ですが、艦隊出動に対するデモは規模を増しています」

漁船監視船に対する艦隊出動に日教組や創価学会などの左翼団体がデモ行進をしているのである。

それに便乗して総選挙で大敗した民主党や社民党、公明党なども反発はしているが長谷川は無視している。

特に民主党に対しては「日米同盟を切ろうとした党が何を言うかッ！！」と長谷川が民主党に一喝している。

なお、与党は自民党と立ち上がれ日本、『大阪維新の会』を更に発展させた『日本維新の会』である。（これは完全に妄想ですｂｙ

作者）

「公安に言って、五月蝿い議員達を捕まえさせるか……」

「それはいくらなんでも無理でしょう」

長谷川の言葉に石橋は冷や汗をかく。

「特捜委員会がどれだけ頑張れるかが問題だな……」

特捜委員会―――『特別捜査委員会』とは議員の汚職を主に捜査する警察の組織である。

委員会は三月に発足して議員の汚職を調べている。

後に、民主党、社民党議員などが在日朝鮮人からの違法献金が多数発覚して大量に検挙する実績を残す事になったがまだ先の話である。

「それと総理。捕鯨船団が今日出港しました」

「護衛艦の護衛は付いているな？」

「はい。護衛艦ゆうぎりとあまぎりが護衛に付いています」

長谷川はシーシェパードの捕鯨船妨害に護衛艦の派遣を決定したのだ。

最初は海保で護衛しようと長谷川は考えたのだが、シーシェパード側がＲＰＧ―７やＡＫ―４７などの武器を購入した情報が入った

のだ。

誤報かもしれないが、本当だとすれば海保の巡視船では到底守れないと長谷川はそう判断をして護衛艦の派遣を決定したのだ。

「……何事も無ければそれでいいんだがな……」

長谷川はそう呟いた。

第十話（後書き）

御意見や御感想等お待ちしていますm（__）m

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6196v/

日本の行くべき道

2012年1月14日08時45分発行